

4. 看護学部看護学科

4.1 理念・目標

4.1.1 教育理念

人間の生命や生活の質を真に理解できる豊かな人間性ととも、専門的職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に貢献できる看護職及び看護指導者を育成する。

4.1.2 教育目標

1. 豊かな人間性と倫理観を備えた人材の育成
人間の生命、生活を尊重し、人の痛みや苦しみを共に分かち合える温かい心、豊かな人間性と倫理観を備えた人材を育成する。
2. 看護学に求められる社会的使命を遂行し得る人材の育成
看護専門職として必要な知識、技術を修得し、人々の健康と生活に関わる諸問題に対して、科学的な根拠に基づく判断力と問題解決能力及び看護学研究に関する思考力と創造性を涵養し、看護学に求められる社会的使命を遂行し得る人材を育成する。
3. 調整・管理能力を有する人材の育成
保健・医療・福祉等について総合的視野を持ち、関連分野の人々と連携・協力して行われる看護実践を通して、調整・管理能力を有する人材を育成する。
4. 国際社会でも活躍できる人材の育成
国際的な視野から、健康問題や看護問題を思考、判断し、国際社会でも活躍できる人材を育成する。
5. 将来の看護リーダーの役割を担う人材の育成
社会状況の変化を踏まえ、看護が担うべき役割を展望し発展させるため、自らの研鑽を重ねながら、その資質向上に努め、看護学の発展に寄与し、将来の看護リーダーとなることができる人材を育成する。

4.1.3 アドミッション・ポリシー（求める人材）

看護とは、「様々な健康レベルの人々が、その人らしく生活できるよう援助する仕事」です。そのため、専門的な知識・技術はもちろん、命を大切にする心や人間としての豊かさが求められます。

本学では以下の資質を有する優秀で意欲ある人材を広く求めます。

1. 大学で学ぶ上で必要とされる基礎学力を身につけている。
2. 人間や生命に関心を持ち、保健・医療・福祉分野で活躍・貢献したいという目的意識を持っている。
3. 周囲の人と協力して物事を進めることができる。
4. 他者の意見に耳を傾け、自分の考えを表現できる。
5. 自己学習・自己啓発を継続する意欲がある。

4.1.4 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）

本学では、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる知識・技術などを修得できるように、人間科学領域の科目と看護専門領域の科目を体系的に編成しています。教育内容、教育方法、教育評価について以下のように定めています。

〈教育内容〉

学生が大学での学修に適応するための科目を初年次に配置する。加えて、人間科学・健康科学・看護学の科目間の連携を図り、それらを統合して学べるように科目を配置する。

看護専門領域に「健康・疾病・障害の理解」「看護の基本」「看護援助の方法」「看護の実践」「看護の発展」の科目を配置する。また、人間の成長、発達、健康の維持増進から終末に至る健康問題を科学的に評価し、生活・療養の場に応じた看護の必要性を学べるように設定する。

さらに、様々な状況に対応できる能力、多職種と連携・協働しながら看護の専門性を発揮できる能力、将来を切り開いていく能力を統合・発展させるための科目を段階的に学べるように設定する

〈教育方法〉

幅広く総合的に看護を学ぶことができるよう、積極的に人々の生活の場に出向いたり、アクティブ・ラーニング、異学年交流等を活用した講義、演習、実習を適切に組み合わせた授業を行う。

個々の学習深度や能力に応じた指導を行うため、個別学習やレポート課題を課し、フィードバックを行う。

学生のより積極的な学習ニーズに応えるため、外部の客観的評価試験や外部の開講科目（放送大学、シティカレッジ等）を活用する。

学年進行に沿って、学修を統合的に積み重ねることができるよう履修指導を行う。

〈教育評価〉

各科目の学習目標の達成度を評価し、その基準は授業計画に示す。加えて、本学の履修規程・学則に基づいて総合的に評価する。

4.1.5 ディプロマ・ポリシー（学位授与に関する方針）

教育理念を基に本学の教育課程に沿って研鑽に努め、指定する卒業単位を修得することで、下記の能力・資質を修得・涵養し、それらを総合的に活用できる人材を養成します。

1. 看護の基盤となる豊かな人間性や倫理観と教養を身につけている。
2. 看護職として専門分野における学問内容の知識・技術を修得している。
3. 人間の身体的・心理的・社会的な健康状態を科学的に評価し、的確な判断ができる。
4. 人々の健康維持と増進、予防、また健康障害から回復過程等、全ての健康段階を連続的に捉え、生活に根ざした支援の必要性を理解できる。
5. リーダーシップを身につけ、自ら多職種と連携・協働することができる。
6. 国際化及び社会の医療ニーズの変化に対応し、生涯を通して自己を高めることができる。

4.2 学部学生の入学・在学・卒業の状況

(1) 入学の状況

①入学定員・収容定員

単位（人）	
入学定員	収容定員
80	320

②試験実施日

実施日	
推薦入試・社会人入試	令和 4年11月19日（土）
一般選抜前期日程試験	令和 5年 2月25日（土）
一般選抜後期日程試験	令和 5年 3月12日（日）

③受験状況等

単位（人、倍）						
	募集定員	志願者数	受験者数	合格者数	実質倍率	入学者数
推薦入試	30	47	47	30	1.6	30(27)
社会人入試	若干名	0	0	0	0	0(0)
一般選抜前期	40	91	82	44	1.9	42(40)
一般選抜後期	10	217	64	14	4.6	11(11)

（ ）の数字は内数であり女性の数を示す

(2) 在学の状況（令和5年3月1日現在）

		単位（人）				
学 年		1年次	2年次	3年次	4年次	計
在学者数	男性	6	5	3	4	18
	女性	78	75	76	78	307
	計	84	80	79	82	325

(3) 卒業の状況

①卒業者数 第20期生

		単位 (人)	
区 分	計	入学年度別卒業者数	
		平成30年度以前 入 学 者	令和元年度 入 学 者
卒業者数	79(75)	1(1)	78(74)

() の数字は内数であり女性の数を示す

②卒業後の進路状況 第20期生 (令和5年3月31日現在)

		単位 (人)					
区 分		県 内		県 外		合 計	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
就 職	看護師	54	68.4%	12	15.2%	66 (62)	83.5%
	国公立病院 (独立 行政法人を含む)	48	60.8%	7	8.9%	55 (51)	69.6%
	上記以外の病院	6	7.6%	5	6.3%	11 (11)	13.9%
	保健師	4	5.1%	2	2.5%	6 (6)	7.6%
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0 (0)	0.0%
	計	58	73.4%	14	17.7%	72 (68)	91.1%
進 学	大学院博士前期課程	6	7.6%	1	1.3%	7 (7)	8.9%
	養護教諭特別別科	0	0.0%	0	0.0%	0 (0)	0.0%
	その他	0	0%	0	0.0%	0 (0)	0.0%
	計	6	7.6%	1	1.3%	7 (7)	8.9%
	未 定	0	0.0%	0	0.0%	0 (0)	0%
	合 計	64	81.0%	15	19.0%	79 (75)	100.0%

() の数字は内数であり女性の数を示す。 割合は、総数79人を100%としたもの

③主な就職先 第20期生 (令和5年3月31日現在)

県	内	県	外
石川県立中央病院		名古屋徳州会総合病院	
金沢大学附属病院		トヨタ記念病院	
国立病院機構金沢医療センター		関西医科大学附属病院	
金沢医科大学病院		淀川キリスト教病院	
JCHO金沢病院		兵庫県立こども病院	
金沢赤十字病院		神戸市立医療センター中央市民病院	
金沢脳神経外科病院		神戸市民病院機構	
公立能登総合病院		明和病院 (兵庫県)	
珠洲市総合病院		東京医科歯科大学病院	
輪島市立輪島病院		東京慈恵会医科大学葛飾医療センター	
公立宇出津総合病院		板橋中央総合病院	
金沢市		舟山病院 (山形県)	
珠洲市		成仁病院 (東京都)	
津幡町		富山県	

4.3 教育・履修体制

本学の教育は、人間科学領域の5学科目群と看護専門領域の5講座に属する教員が担当します。

領域	学科目群又は講座	科目群	教育内容
人間科学領域	人間形成系群	健康体力科学	自己の健康・体力づくりを生涯にわたり実践していくための理論と方法を修得させるとともに、看護の対象者の健康獲得を目指すための知識と技術について教授する。
	人文科学系群	哲学	哲学・心理学的な思考を通して、人間の本質と存在の意義について理解を深めるとともに、看護職者として悩める人を理解し援助するための知識と方法、態度について教授する。
		心理学	
	社会科学系群		人々の生活を支える社会のしくみと人間と社会環境との関わりについて理解を深めさせるとともに、社会科学的視点から保健・医療・福祉・看護が抱える諸問題について教授する。
	自然科学系群	人間工学	人々の生活と環境との関わりや人間と環境との共生について理解を深めさせるとともに、人間の日常生活行動や看護現場での諸問題について人間工学的側面から教授する。
	国際・情報科学系群		英語
情報科学			
看護専門領域	健康科学講座	機能・病態学	人間の生命現象や身体の構造・機能と心身の健康の保持・増進、疾病・障害の発症と回復のしくみに関する理論と知識、技術を科学的根拠に基づいて系統的に教授する。
		保健・治療学	
	基礎看護学講座	基礎看護学	「看護とはなにか」という看護の概念・本質と看護の基本となる理論と知識・技術、及び看護職者として必要な態度について教授する。
	母性・小児看護学講座	母性看護学	ライフサイクルのうち、妊娠・分娩・出産から思春期にわたる母子とその家族に特徴的な発達課題と健康問題を踏まえ、看護援助に必要な知識や理論と実践の方法について教授する。
		小児看護学	
	成人・老年看護学講座	成人看護学	ライフサイクルのうち、成人期から老年期にわたる対象に特徴的な発達課題と健康問題を踏まえ、看護援助に必要な知識や理論と実践の方法について教授する。
		老年看護学	
	地域・在宅・精神看護学講座	地域看護学	地域で生活する個人・家族・特定集団・地域住民全体を対象とした地域看護の特徴を踏まえ、活動の場(学校、職場、在宅、地域全体)とその対象の特性に応じた看護援助、及びライフサイクル各期のメンタルヘルスの課題や精神的な健康問題をもつ対象への看護援助に必要な知識や理論と実践の方法を教授する。
在宅看護学			
精神看護学			

4.4 委員会活動

4.4.1 常設委員会

4.4.1.1 教務委員会

委員長：桜井 志保美 教授

委員：平居教授（副委員長）、川島教授、石川教授、美濃教授、米澤教授（後期）、金子准教授（前期）、松本勝准教授、工藤講師（前期）、中嶋（優）講師（後期）、曾山講師、千原助教

委員補助：今方助教、額助教、高濱助教（後期）、加藤助手

事務局：河端教務学生課長、南主事（前期）、架谷主事（後期）

<今年度の目標>

1. 旧カリキュラムから新カリキュラムへの移行措置期間であり、円滑なカリキュラム運営に努める。
2. 学生の主体的な活動やアクティブ・ラーニングの授業を実践する。新型コロナウイルス感染症状況を注視しつつ、必要に応じてオンラインを活用する。
3. 医療、社会制度の動向に沿った教育を実施するために、臨床教授等と連携して、臨地実習における課題を明確にし、大学と臨床現場双方のニーズや工夫等について意見交換を行う。

<活動実績>

教務の所掌業務に関して、以下の事項の審議を行った。

1. カリキュラム変更にともなう新・旧カリキュラムの学生への同質の学修の機会の提供と履修指導
2. 随時試験・定期試験の時間割と試験監督の決定
3. 時間割、教室の配置
4. 電子教科書導入の検討および説明会の実施
5. 非常勤講師用の任用
6. 成績判定・修得単位および卒業要件の判定
7. 石川コンソーシアムのシティカレッジの科目提供と受講科目の成績判定
8. 臨床教授等の称号付与
9. 特別講義の実施
10. 卒業研究に関する教員および学生配置（学生配置における面談システムの検討・導入）
11. 卒業研究発表会の実施
12. 令和5年度看護学実習計画・実習暦、ヒヤリハットへの集計・分析と防止対策
13. 中期計画の具体的な取り組み
 - 1) 臨床教授等との交流会の開催（オンライン：本学実習方針の説明・教員との意見交換）
 - 2) 次年度に向けたコロナ禍での民泊型フィールド実習の課題と対策
 - 3) フィールド実習担当者会議の開催、次年度に向けた改訂

- 4) ヒューマンヘルスケア (Human Health Care) 科目担当者会議の開催、ハイブリッドによる成果発表の実施
14. その他、以下の事項について検討し、教授会及び教育研究審議会に提出した。
- ・成績評価判定
 - ・GPAの取り扱い
 - ・非常勤講師任用における学内科目責任者について

<次年度以降に向けた課題・発展>

1. 2022年度カリキュラム導入における学修評価
2. 異学年交流を推奨した学修促進
3. 電子教科書・ペーパーレスを導入し、授業の効率化、学修効果を検証

4.4.1.2 学生委員会

委員長：米田 昌代 教授（学生部長）

委員：桜井教授、市丸准教授、松本（智）准教授、金子准教授、工藤講師、田村講師、大江講師

委員補助：野沢助教、黒川助教、千田助教

事務局：河端教務学生課長、林専門員、南主事（前期）、架谷主事（後期）

活動内容：

<前年度までの課題>

1. 学生の諸活動の活性化を図り学生個々の意欲向上に向けたサークル活動・地域活動等対面交流の確保
2. 学生アンケートの回収数の確保
3. コロナ禍の影響による学生の心身の健康課題等の把握とその改善策

<今年度の目標・年度計画>

1. 新型コロナウイルス感染状況に合わせた学生への活動方針を適時周知し、大学祭等の行事、各サークル活動や地域活動が活発となるような支援方法について検討し、実施する。
2. 学生と教職員等の座談会やアンケート調査を実施(回収率のアップをめざす)し、学生の要望を踏まえた学修支援の充実を継続して図る。
3. 教員と事務局、外部カウンセラーが一体となった学生相談体制の充実と学生同士による学修及び学生生活の支援を強化する。(効果的な担任制の在り方について検討する)

<今年度の活動実績・評価>

1. 新型コロナウイルス感染状況に合わせた学生への活動方針を適時周知するとともに、一部のボランティア関連のサークルにおいて、教員の監督の元で感染に留意しながら活動を継続するよう促した。また、感染拡大に留意しながら、各行事のサポートを実施した。
 - 1) 自治会主催の新入生歓迎会(桜フォーキング)(4月9日)を開催した。参加者は60名程(内1年生約30名)で先輩・同級生との交流がもて、サークル紹介もあり好評であった。
 - 2) 初年次学修支援「先輩から学ぼう！授業の受け方」(4月28日)をオンラインで開催した。

3年生2名、2年生3名より、具体的ノートのとり方やそれぞれの勉強方法について話してもらった。新入生アンケートの結果、今後に活かすことができる内容であり、好評が得られたが、もう少し早い開催が希望された。

- 3) 開学記念日(5月29日)において学生大会の実施サポートと今年度から就任された真田学長の講演「次世代看護学の幕開け」をオンラインで実施した。学生の感想には、「看護が想像以上に発展することができることに驚き、感動した」「研究に興味があった」「患者のためになる看護とは何かについて常に疑問を持ち追求する姿勢が重要であると感じた」等が記されており、今後自ら看護を学んでいく上での強いモチベーションにつながった貴重な講演となった。次年度の開学記念講演講師を決定した。
- 4) 大学祭実行委員会による第23回看大祭「全力笑顔!!!!」(10月22日・23日)の開催を支援した。3年ぶりに外部から来場者を招いての、2日間の開催であり、講演会に羽田美智子氏をお呼びするという大きな企画にチャレンジした。来場者332組(講演会約250名)、学内は2日間で延べ180名ほどが参加し、運営した学生からは「責任をもって取り組むことができた」「教員との距離が縮まった」、参加した学生からは、「楽しかった」という感想もみられ、学びも多く、無事に終えることができた。1年生の巻き込み方や今後の教員のサポートの在り方については課題が残った。
- 5) 3年生に対して、実習や就活・ゼミについて、4年生からの話を聞く学生セミナー(8月10日)を開催した。4年生の実習調整委員6名が3年生8名ずつのグループに入り、グループディスカッションを実施した。アンケート結果では、「実習のイメージがわいた」「実習の準備や気を付けること、就活の対策、ゼミの進め方等聞けてよかった」と好評であった。
- 6) 自治会役員主導で1年生と2年生の交流会(10月27日)の開催を支援した。基礎看護実習Iを控えた1年生の不安を少しでも取り除くという趣旨で、「実習について話す会」というタイトルで開かれ、18名の1年生が参加し、2年生の自治会役員3名が実習経験に基づいて、1年生の質問に回答した。参加した1年生は熱心に聞いており、当日参加できなかった学生にも共有できるように掲示版に掲示した。
- 7) 3年生に対して、就活、国試、卒論に対して4年生からの話を聞く交流会(2月22日)を開催した。アンケート結果では、ほぼ100%の学生が満足と回答しており、就活の具体的な情報や国試の勉強方法について聞くことができ、今後の見通しを立てることができていた。
- 8) 卒業生とのオンライン座談会(3月15日～17日)を開催した。9名の卒業生に協力を依頼し、質問に答えていただいた。全体で、2年生11名、3年生62名が参加し、ほぼ100%の学生が満足しており、それぞれの病院の特徴や、病院の決め方、就職先での働き方、大学院の準備の仕方等情報を得ることができていた。
- 9) 自治会活動、サークル活動等で活躍した学生に対して、卒業式にて学長表彰を実施した。
- 10) 感染拡大防止対策のために、日々の感染対策を促すとともに、長期休業前の注意喚起、担任・教務学生課による感染者発生時の行動把握と拡大防止のための指導・消毒、感染予防物品の管理を実施し、学内でのクラスター発生を予防することができた。
- 11) サークル活動の把握(継続7団体、解散7団体)と助成(4団体)を行った(11月)。コロナ禍で活動できなかった間に所属していた学生が卒業し、後輩に引き継がれていない現状であり、継続できる団体が半減している。活動拡大に伴い、新規にサークル活動を立ち上げるように、促していく。

2. 学生と教職員等の座談会やアンケート調査を実施し、学生の要望を踏まえた学修支援の充実を図ることができた。
 - 1) 学生自治会と教職員の座談会(1月18日)を開催し、学生の要望を聞くとともに、建設的な話し合いを実施した。要望に応えられるところ、改善すべきところについては教職員に周知し、今後改善していく。
 - 2) 在学生アンケートを12月のクラスアワー時に質問内容の重複を整理し、自己点検評価委員会と合同で実施し、90%の回答率が得られた。次年度に向けて、アンケート結果を学修支援に反映していく予定である。
3. 学生相談体制の充実については学生相談部会に記載。効果的な担任制の在り方については来年度も引き続き、検討することになり、2025年度に向けて、学生委員会、相談部会との役割とも合わせて検討していくことになった。

＜次年度以降に向けた課題・発展＞

1. サークル活動の活発化:新規サークル立ち上げを呼びかけたり、既存のサークルの復活を促し、サークル活動の充実を図ることが求められる。
2. 初年次研修の時期:学生からの早めてほしいという要望を受けて、4月の初旬～中旬に実施できるよう準備する。
3. 大学祭の参加促進・学生主体の運営:学生が主体的に動けるような大学祭のサポートの在り方を考える。
4. コロナ禍の影響による異学年交流の不足:上記1～3の活動等を通して、異学年交流がより一層進むように支援する。

4.4.1.2.1 学生相談部会

部会長：米田 昌代 教授

部会員：河合助教、瀬戸助教、大橋助教、高濱助教(後期)、河端教務学生課長、
野川囑託

心理カウンセラー：堂本

活動内容：

＜前年度までの課題＞

1. 合理的配慮が必要な学生に対する支援体制の整備
2. 学生のメンタルヘルス危機対応の整備

＜今年度の目標・年度計画＞

1. 合理的配慮が必要な学生に対する支援に対する勉強会と体制の試行
2. 学生のメンタルヘルス危機対応指針作成
3. 相談員の学生相談に関わる実態の把握

＜今年度の活動実績・評価＞

1. 合理的配慮が必要な学生に対する支援に対する研修と体制の試行
 - 1) 障がいがある学生への修学支援が実施されるまでのプロセスのフローチャート案と修学支援申請書・決定書を作成した。申請があった場合、試行する予定であったが、まだ、

申請者はいずれ、使用にはいたっていない。試行段階を継続していく。

- 2) 障がいのある学生の修学支援に関する勉強会(9月8日)を学生委員会、相談部会、担任部会の教員を対象に当大学心理学の名誉教授の武山雅志先生に来ていただき、講演・意見交換を実施した。個人個人を見て本人・家族とやりとりしながら、支援を考えていく必要性について学んだ。
2. 学生のメンタルヘルスに対する緊急時の危機的状況に対応するため、保健室の機能を充実させ、専門家との連携による支援体制の見直しをはかった。来年度はこの体制に基づき、実施していき、課題があれば修正していく。
3. 相談員の学生相談に関わる実態の把握
 - 1) カウンセリング「ほっとルーム」は、2回/月(第2木曜日:13:30~17:30、第4木曜日:14:00~18:00)の定期に開室した。カウンセリングの年間のべ相談件数は53件(1年7件、2年4件、3年8件、4年21件、大学院生13件)であり、その内の9件はオンライン面談であった。また、カウンセラーへの保健室担当者および教員の年間コンサルテーションは28件であった。
 - 2) 相談を受けた学生には、本人が情報共有を許可した教職員間(学年担任、学生相談部員、保健室担当者、カウンセラー、進路アドバイザー等)で連携し、継続的にサポートした。必要に応じて保護者との面談を実施した。また、緊急性の高いケースでは、学生の意思を尊重しながら早期に心理カウンセラー・医療機関へ繋いだ。
 - 3) 相談員個々の学生相談に関わった時間・内容の概要は収集途中のため、次年度まとめて報告する。
4. その他

学生相談部員による「ほっとルーム便り」を年間4回発行し、カウンセリングの周知、学年暦に応じた心身への健康維持に必要な情報等の発信を行った。

<次年度以降に向けた課題・発展>

高校時代にコロナ禍の影響を受けた学生たちが入学してくることにより、メンタルヘルスに問題を抱えやすい学生が増える可能性がある。メンタルヘルスの維持向上のためには、メンタルヘルス問題の早期発見のための啓発活動、教職員に対するメンタルヘルスへの対応に関する研修、学生自身のメンタルヘルス研修等を今後企画し、対策していく必要がある。

また、新たな保健室を中心としたメンタルヘルスへの対応がスムーズに進むように、新しく着任する養護教諭・カウンセラーと話し合いを十分に行い、体制を整えていく。

4.4.1.2.2 進路支援部会

部会長：松本 智里 准教授

委員：濱教授、米澤教授(後期)、金谷准教授、金子准教授(前期)、寺井准教授、
大江講師、大西講師、日高講師

活動内容：

<前年度までの課題>

- 1) 県外就職試験の早まりや感染拡大の影響を踏まえ3年生早期からの就職相談を行う。
- 2) 低学年からのキャリア支援を継続する。
- 3) 国家試験対策の1つである強化学習を希望者も含み行う。

<今年度の目標・年度計画>

- 1) 希望とする進学・就職先の受験・内定ができるよう支援する。
特に県外就職者への受験時期に関する支援を重点的に行う。
- 2) 国家試験で学生の力が最大限発揮できるよう学習支援、学習環境調整を行う。
- 3) 全学年へのキャリア支援を行う。

<今年度の活動実績・評価>

1) 進路支援

- ①4年生への進路支援は、8名のアドバイザー教員による担当制で行った。
- ②県外を就職希望する学生には、3年生後期から進路支援アドバイザーによる支援を行った。感染対策上、実習と就職試験日との兼ね合いをみて就職先を選択するよう指導した。
- ③4年生79名全員の就職・進学先が決定した。

2) 国家試験対策：看護師国家試験合格率100%

- ①4年生が主体となって、模擬試験の年間計画立案、実施を行った。感染対策や大雪を想定して冬季の模試試験の実施方法をオンラインとする検討も行った。
- ②進路アドバイザーが模試試験結果をもとに個別に支援をした。
- ③強化学習として、模試試験の成績不良者と強化学習の参加希望者を対象に、学習方法の支援、必修問題、一般・状況設定問題への強化を図った。
- ④国家試験10日前に、教員が作成した必修問題を用いて試験を実施した。
- ⑤4年生を対象に、看護師対策2回、保健師対策5回の補習を行った。

3) 全学年へのキャリア支援

- ①開学20周年記念行事で行われた卒業生のシンポジウムの動画を、オンライン上 (moodle) にアップし、1～3年生に視聴を推奨した。6月の1か月間、動画を公開し、123名の視聴回数があった。
- ②前年度3月に開催された卒業生と3年生との座談会のzoom録画をオンライン上 (moodle) にアップし、低学年に視聴を推奨した。
- ③マイナビ看護学生による就職支援ガイダンス
8月10日 (水) 13時～14時半 本学大講義室 参加者：3年生70名、教員7名
2月22日 (水) 11時～12時半 本学大講義室 参加者：3年生74名、教員9名
前年度は2月に就職支援ガイダンスを本学教員が行っていたが、3年生に早期から就職活動を意識してもらうため、今年度は8月と2月に実施した。全国規模で学生の就職支援をしている外部業者にガイダンスを依頼することで、県内だけでなく全国の就職活動の動向を学生に伝えられた。
- ④3年生を対象に低学年模試を実施した。
・第1回 8月10日 (水) 9時～12時 本学大講義室 参加者：3年生75名
・第2回 2月22日 (水)～3月8日 (水) 第111回看護師国家試験問題に取り組んだ。

<次年度以降に向けた課題・発展>

- 1) 県外だけでなく、県内の就職試験も早まっているため、3年生前期から就職相談対応をしたり、就職説明会への参加を促したりして、卒後の進路に対する意識づけを早期から行う。
- 2) 低学年からのキャリア支援を継続する。
- 3) 国家試験対策の1つである強化学習を希望者も含み行う。

4.4.1.3 研究推進委員会

委員長：今井 秀樹 教授

委員：濱教授、石川教授

事務局：長谷川主幹

活動内容：

<前年度までの課題>

- 1) 新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、すべての活動がオンラインで行わざるを得ない。
- 2) 科研費等外部研究費の獲得を拡大する必要がある。

<今年度の目標・年度計画>

- 1) 研究ウェルカムセッション

本年度着任の教員（講師以上）の研究内容の自己紹介を昼休み時間帯を利用して全教員参加のもとに行う。

- 2) 研究サポート集会

若手教員を対象に科研費獲得のための申請書の書き方の講習を行う。

- 3) 学内研究助成報告会

昨年度末で終了した学内研究助成の成果発表を行う。聴衆は全教員とする。

- 4) 石川県立大学・県立看護大学合同研究発表会

石川県立大学の教員と本学の教員との共同研究の成果発表を行う。聴衆は両大学の全教員とする。

<今年度の活動実績・評価>

- 1) 研究ウェルカムセッション

開催日時：令和4年8月30日 12：15～12：50

形式：Zoomによるオンライン発表

演題および講師：「ライフワークとしての精神科身体合併症看護・司法精神看護—これまでの研究・教育の概要と展望—」 美濃由紀子 教授（精神看護学講座）

- 2) 研究サポート集会

開催日時：令和4年8月5日 15：00～16：00

参加者：41名

形式：Zoomによるオンライン発表

演題および講師：「科研費申請の事務手続きについて今年の申請のポイント」 外主任主事（事務局総務課）「科研費獲得に向けた申請書作成のアドバイス」 峰松教授（成人看護学講座）

- 3) 令和3年度学内研究助成成果報告会

開催日時：令和4年8月5日 13：00～14：40

参加者：各セッション14-32名

形式：Zoomによるオンライン発表

演題および講師：「看護師がアピアランスケアにおいて多職種との協働を行う際に抱く困難感」松本智里准教授（成人看護学講座）、「介護保険施設における新型コロナウイルスへの感染対策と感染流行時の入所者家族への対応」額助教（老年看護学講座）、「生活習慣病とフレイル発症・進展の予防関連因子の検討のための基盤研究-かほく市における食習慣と健康に関する調査（KAHOKU HEALTH STUDY）」垣花教授（人間科学講座）、「ヒト筋芽細胞における免疫制御因子発見の解明」岩佐教授（健康科学講座）、「下大静脈の描出・計測に向けたセルフモニタリング心エコーの考案」大橋助教（成人看護学講座）、「「同意」概念の哲学的基礎付け」高井前講師（人間科学講座）

4) 石川県立大学・県立看護大学合同研究発表会

開催日時：令和4年8月24日 14：30～17：10（FD研修会の時間も含む）

参加者：75名

形式：Zoomによるオンライン発表

演題および講師：「スキنبロッキング：非侵襲的スキンアセスメント技術の開発と応用」峰松教授（成人看護学講座）、「乳酸菌の産生する機能性菌体外多糖の医薬・食品産業への応用に向けた基盤構築」松崎講師（石川県立大学生物資源工学研究所）、「日本の中山間地域で人口減少の進行がゆるやかな地域の社会文化的特徴 一宮崎県椎葉村を対象として一」日高講師（在宅看護学領）、「次世代シーケンサーを用いた効率的遺伝解析技術の開発と実用展開」高木准教授（石川県立大学生産科学科）

<次年度以降に向けた課題・発展>

いずれの行事もオンライン形式であった。来年度は是非すべて対面で行い、特に石川県立大学・県立看護大学合同研究発表会においては両大学の教員間の交流を活発にする機会としたい。

4.4.1.3.1 学内研究助成専門部会

委員長：垣花 渉 教授

委員：今井（秀）教授、牧野教授、桜井教授

事務局：長谷川主幹

活動内容：

本部会は、学内研究助成全般のあり方の検討と実際の学内研究助成に関する申請書類の審査、報告書の評価、予算案の提案を主たる活動とする。

学内研究助成に関する申請書類の審査を4回行った。令和4年5月に令和4年度学内研究助成（研究プロジェクト）の2次募集を行った。採択件数は2であった（申請4件）。令和4年8月に令和4年度学内研究助成（研究プロジェクト）の3次募集を行った。採択件数は14であった（申請15件）。令和5年1月に1件、2月に1件の令和4年度学内研究助成（研究成果公表）の申請があり2件とも承認された。

学内研究助成報告書の評価を2回行った。令和4年12月に令和2年度学内研究助成（研究プロジェクト）の報告書（5件）の審査を行った。令和5年2月に令和4年度学内研究助成（研究プロジェクト）の中間報告書（7件）の審査を行った。

4.4.1.4 石川看護雑誌編集委員会

委員長：濱 耕子 教授

委員：今井（秀）教授、紺家教授、米澤教授（後期）

委員補助：瀬戸助教、桶作助教

事務局：中村主幹兼係長、外主事

活動内容：

<前年度までの課題>

外部査読制をとらない本誌は、学術論文としての存続が難しくなりつつある。そこで、投稿申込状況の把握と今後の対策・課題についての検討を行う必要がある。

<今年度の目標・年度計画>

1. 今年度の「石川看護雑誌」発刊が無事に終了する。
2. 本誌の今後のあり方や投稿数確保のための意見交換を行い、編集委員会レベルで課題を共有できる。
3. 本誌への投稿が円滑に行えるよう、投稿規定の見直しをはかる。

<今年度の活動実績・評価>

1. 「石川看護雑誌」（第20巻）を予定通りのスケジュールで発刊した。

博士学位申請で早期採択を目指す6月募集時の応募はなかった。

9月募集時には、原著論文以外に総説や資料、研修活動報告等による投稿も積極的に受け入れる方向で進めた。

結果としては、特別寄稿として第3代石垣学長による最終講義内容1編、卒業生を筆頭とする原著論文2編の計3編を掲載した。特別寄稿は依頼原稿であるため査読はせず、業者委託でテープ起こしの後、著者にてカラー刷りで原稿作成、その後、委員長による校正作業で進めた。予定通り、第20巻は3月末に発刊された。

2. 本誌のあり方を図書館長と編集委員会で検討し、その後、学長を交えて意見交換した。

第2回編集委員会（9月16日開催）、学長との意見交換（9月30日開催）にて、退職教員による特別寄稿や講座での教育研究の取り組みの依頼原稿を作成してもらった。また、学部生や卒業生を対象にフィールド実習、ヒューマンヘルスケア、卒業研究の内容で、応募を推奨する案が挙げられた。

3. 投稿規定の見直しをはかった。

第1回編集委員会（5月18日開催）にて、投稿の現状に合わせ、投稿規定を見直した。

『Ⅰ. 投稿に関する規定』：本誌投稿に関する問い合わせが外部から入る可能性がある（過年度に入った）ため、連絡先はそのまま「附属図書館受付」とした。

『Ⅱ. 投稿原稿の執筆要領』：原著論文と資料別にページ数の追加と、1桁の算用数字は全角とする旨に修正した（算用数字の件は、今年度の応募に際しては口頭伝達に留めていたが、2023年度に向けて第20巻の発刊時に投稿規定を修正した）。

<次年度以降に向けた課題・発展>

2023年度入学生から紀要（本学以外の雑誌も含む）は本学の学位論文申請時の条件から外され、6月募集の必要性がなくなった。学外査読制を取らない本誌では、大学院生や教員を筆頭とする応募は今後とも少なくなることが考えられる。

編集委員会より、今後は応募対象を広げ、学部生が投稿しやすくなるよう応募を推薦制にする、査読を課すか否かを投稿側と相談する、投稿スケジュールの見直し、ポスター形式で1ページ掲載にする等の論文形態の選択肢を増やす提案があった。全学的に新しい本誌のあり方を理解してもらえるよう、具体的な対策を検討する。

今後は本誌の配布先はこれまでと同様でよいか、本誌の位置づけや掲載内容から考えて検討していく。

4.4.1.5 情報システム委員会(含む情報セキュリティ)

委員長：峰松 健夫 教授

委員：市丸准教授、中嶋（知）助教

事務局：外主事

活動内容：

<前年度までの課題>

サンダーバードに代わるメールシステム、Moodleに代わるLMSの可能性について、引き続き県立大学および法人と検討する。

<今年度の目標・年度計画>

石川県公立大学法人情報セキュリティポリシーの適切な運用を行うとともに、職員を対象とした情報セキュリティ研修や学生を対象とした教育活動を行う。また、情報資産管理システムによるソフトウェア・ライセンス及び情報機器の適正な管理に努める。

教員対象にWi-Fiアクセスポイントの実態調査を実施し、必要に応じて点検・整備・修善を実施する。Moodleの運営・管理をサポートする。サンダーバードに代わるメールシステム、LMSの運用について県立大学および法人と検討する。

<今年度の活動実績・評価>

- ・対面およびメールにて情報システム委員会を開催し、学内の情報機器・システムの課題抽出と適正な管理・運用について協議を行った。
- ・来年度実施予定の情報システム機器更新に向け、法人のヒアリングおよび調査に対する学内の要望を取りまとめ、回答および交渉を行った。
- ・学内のWi-Fiの受信状況を調査し、アクセスポイントの増設を行った（体育館2機、講堂3機、教育研究棟2機、管理棟1機）。
- ・令和4年4月4日・5日 市丸委員（本学Moodleマネージャー）が教職員および大学院生を対象としたMoodle研修会を開催した。
- ・令和5年3月3日 コンプライアンス委員会、倫理委員会と合同説明会を開催し、峰松委員長が教職員および大学院生を対象とした情報セキュリティ教育を実施した。
- ・来年度以降本学で実施されるDX化に向け、教務委員会およびDX推進委員会と連携し、市丸委

員がMoodleの活用法に関する教育（令和5年2月9日）、および模擬授業（令和5年3月10日）を行った。

<次年度以降に向けた課題・発展>

本学のDX化に連動し、LMSやメールシステム、ファイルサーバーへのアクセシビリティ等について検討、対応、および周知に努める。また、情報システム機器更新に伴う各種調整、対応、教育等を行う。

4.4.1.6 広報委員会

委員長：平居 貴生 教授

委員：真田学長、小林教授（研究科長）、米田教授（学生部長）、
岩佐教授（附属図書館長）、塚田教授（附属地域ケア総合センター長）、
紺家教授（附属看護キャリア支援センター長）、桜井教授、中道准教授、
曾山講師、中嶋（優）講師（後期）、
西田事務局長、小幡アドミッションアドバイザー

委員補助：瀬戸助教、大橋助教、牛村助手

事務局：久保石専門員

活動内容：

<前年度までの課題>

- 1) 新型コロナウイルス感染症予防対策を講じながらの参加型オープンキャンパス運営の検討
- 2) ナースカフェの充実(参加者との交流方法の検討)
- 3) HPの充実（特に研究・教育面での情報発信）

<今年度の目標・年度計画>

参加型オープンキャンパス開催

<今年度の活動実績・評価>

1. オープンキャンパス

今年度のオープンキャンパスは3年ぶりの対面での開催であった。ただし新型コロナウイルス感染症予防のために、参加予約型の対面オープンキャンパスとした。また、WEBオープンキャンパスを同時に開催した。

1) 夏のオープンキャンパス

日時：7月10日（日）第1部10時～12時 第2部13時～15時

参加者：対面285名（保護者含む）

- オープンキャンパスグッズ（水、ノート、ボールペンなど）。
- 大学説明会（学長挨拶、副入試委員長入試説明、学生による概要説明）
- 模擬講義
- キャンパツアー（看護系の実習室、スキルラボで体験や見学）
- 個別相談コーナー（高校生対象）
- 個別相談（保護者対象）

- ナース・カフェ（対象：中学生・高校1年生）
大学キャンパスツアーを企画した。
アンケート（回答者には、特別記念グッズ）
- オンライン大学院進学説明会（申込者：19名）
- WEBオープンキャンパス（開催時期：7月10日～7月31日、参加者延べ463名）

2) 秋のオープンキャンパス

日 時：10月22日（土）10時～12時

参加者：対面152名（保護者含む）

※WEBオープンキャンパスの参加者は延べ104名

内容は夏のオープンキャンパスと同様であった。夏のオープンキャンパスに参加できなかった高校生の参加を優先して開催した。

2. キャンパスネット IPNU（大学新聞）

①第41巻（2022年5月号の編集・発行）

特集は「石垣学長から真田学長へつながるバトン」を取り上げ、石垣前学長と川島教授のインタビュー記事を掲載した。

②第42巻（2022年11月号の編集・発行）

大学院の魅力を伝えるため、特集は「石川県立看護大学-過去・現在・未来-」を取り上げ、これまで本大学院に多大なる貢献があった牧野教授と川島教授のインタビュー記事を掲載した。

3. 大学案内（学部・大学院）広報誌の発行

①2023大学案内の企画立案・編集・発行

②2023広報誌の企画立案・編集・発行

4. ホームページ

トップバナーを見やすいように改修した。また、大学公式YouTubeチャンネルを開設したので、その情報を掲載した。

5. 大学コンソーシアム石川

①広報事業：石川の大学ガイドブック「イシカレ」

②出張オープンキャンパス事業（星稜高等学校、野々市明倫高等学校）

③合同大学説明会「ガクフェス2022」

対面開催：7月18日、金沢駅

オンライン開催：7月23日（Zoom）

④「学都石川」高校教員向けキャンパスツアー受け入れ

10月18日（27名受け入れ）

6. その他の広報活動

①大学ポスターの作成

②大学PR動画の作成

③大学公式YouTubeチャンネルの開設

④「進学と体験の1day」に参加

概要

日 時：令和4年7月24日 10:00～15:00

場 所：金沢駅もてなしドーム地下広場

主催者：株式会社日本医療企画

内 容：高校生及び中学生を対象とした進学相談

(備考：新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況を考慮し、本学の学生の参加及び仕事体験を取り止め、教員1名・事務局1名による対応に留めた。)

本学来訪者数：高校生20名（男性2名）、保護者8名

<次年度以降に向けた課題・発展>

- ポストコロナ時代のオープンキャンパス開催方法を検討
- 高校生が利用しやすいHPへ改修
- YouTubeチャンネルの動画コンテンツの充実

4.4.1.7 入学試験委員会

委員長：真田 弘美 教授（学長）

委員：紺家教授（副委員長）、小林（宏）教授、平居教授、亀田教授、市丸准教授、
金谷准教授、西田事務局長

事務局：砂山専門員、小幡アドミッションアドバイザー

活動内容：

- 1 令和7年度から共通テストに導入される「情報」科目の本学での利用に関して検討し、その結果を公表した。
- 2 令和3年度より学校推薦型入試に導入した活動報告書を見直し、受験生が記載しやすいよう様式を改訂した。
- 3 学校推薦型選抜の受験状況を分析し、令和6年度入試から学校推薦型選抜の1校当たりの推薦者数の上限を見直した。
- 4 アドミッションアドバイザーによる高校訪問に加え、高校での進路ガイダンスや合同進学説明会に入学試験委員会委員を派遣した。
- 5 学部入試の面接評価方法等を見直した。
- 6 高大接続意見交換会の際に、石川県内に限定せず北陸3県の高校に参加を呼びかけた。また、会当日にはスキルラボや看護教育のDX化の実際を高校教諭の方々に見学できる機会を設けた。
- 7 「学都石川」高校教員向けキャンパスツアー事業にて、県外の高校教諭25名を対象に入試委員会にて本学の特徴を説明した。
- 8 本年度の本学の学部入試、大学院入試また大学入試共通テストにおいて、入試実施にかかわる重大なトラブルはなかった。

- 9 昨年度に引き続き、入試実施においては手指消毒、席の配置など新型コロナウイルス感染症対策を行った。また本学の個別学力試験において新型コロナウイルス感染症が理由で受験できなかったものに対して対応を準備したが、結果として対象者はいなかった。

4.4.1.7.1 入学試験実施部会

部会長：非公開

部会員：非公開

活動内容：

1. 看護学部入学試験の準備・実施体制およびそれに付随する業務
2. 研究科入学試験の準備・実施体制およびそれに付随する業務
3. 大学入学共通テストの会場準備・実施体制およびそれに付随する業務
4. 看護キャリア支援センターが実施する感染管理認定看護師教育課程入学試験の実施支援

4.4.1.7.2 入学試験評価部会

部会長：市丸 徹 准教授

部会員：非公開

活動内容：

<前年度までの課題>

学校推薦型選抜試験の「活動内容報告書」を導入した初年度となる。実施前は、評価者・高校への理解と周知をする。実施後は課題の洗い出しをする。

<今年度の目標・年度計画>

- ・大学入学共通テストの新科目「情報」の本学入試における取り扱いについて検討する。
- ・本学の推薦・社会人入試、一般入試における面接試験の点数配分を見直す。

<今年度の活動実績・評価>

- ・石川県下の高校における「情報」科目の教育支援体制を調査した結果、現状では不十分でありかつ高校間の格差が大きいため、本学入試への導入における公平性の確保は難しいとの評価を入学試験委員会に提出した。
- ・過去3年分の本学入試受験者における大学入学共通テスト、小論文、面接の各得点の情報を解析し、それらの相関および面接配点を変えた場合のシミュレーション結果をまとめ、入学試験委員会に提出した。

<次年度以降に向けた課題・発展>

- ・「情報」科目の本学入試への導入を判断するための指標を検討する。
- ・本学の推薦・社会人入試、一般入試における面接試験の点数配分の変更に伴う合格者への影響を把握し、評価する。

4.4.1.8 自己点検・評価委員会

委員長：真田 弘美 教授（学長）、岩佐 和夫 教授（委員長代行、学長補佐）

委員：今井（秀）教授（副委員長）、今井（美）教授（副委員長）、
金子准教授（年報編集部会長）、川島教授（副委員長、学長補佐）、
小林教授（研究科長）、紺家教授（学長補佐、附属看護キャリア支援センター長）、
桜井教授（教務委員長）、塚田教授（附属地域ケア総合センター長）、西田事務局長、
濱教授（教員評価部会長）、牧野教授（がんプロ総務委員長）、
松田准教授（IR推進部会長）、美濃教授（FD委員長）、米田教授（学生部長）

委員長補助：河合助教、後藤助教、瀧澤助教

事務局：外主事

委員会開催頻度：6月、9月、11月、1月、3月 計5回開催

活動内容：

<前年度までの課題>

1. 教育の内部質保証のための調査の準備と実施
2. 教員評価方法の検討
3. 本学独自のIRの探求と法人と連携したIRの探求

<今年度の目標・年度計画>

- 1) 大学評価における改善課題及び改善報告書の作成
- 2) 学習成果の測定・把握方法を検討
- 3) 教員単年評価の実施
- 4) エフォート率に基づいた教育、研究等の時間配分の検討
- 5) 本学のIRの探究
- 6) 年報内容の検討
- 7) 第3期中期計画作成に向けた提言

<今年度の活動実績・評価>

- 1) 大学評価における改善課題及び改善報告書の作成

学部・院の学位授与方針に定めた学習成果の測定・把握方法及び活用法の改善および内部質
検証委員会の提言に対する活動内容を検討し、課題改善報告書の作成に着手した。

- 2) 学習成果の測定・把握方法を検討

教育の内部質保証の確保と評価を行うため、学生委員会、自己点検評価委員会で行っていた
在学生および卒業生アンケートの見直しと統一化を計った。

FD委員会における授業アンケートの見直しを行った。

外部機関によるジェネリックスキルのアセスメントテスト（PROG調査）を行った。

- 3) 教員単年評価の実施

教員の評価を数値化し目標設定を明確にするために、自己評価にエフォート率、KGI・KPIを

取り入れた教員単年評価方法を検討し、評価シートを作成した。教員への説明会開催、コメント集約を行った後に教員自己評価の仮試行をおこなった。

4) エフォート率に基づいた教育、研究等の時間配分の検討

教員単年評価にエフォート率を取り入れ、自己の年間における教育・研究等の時間配分を評価し、研究におけるエフォート率を30%とすることを目標とすることを提言した。

5) 本学のIRの探究

IR推進部会より活動推進に向けたファイルサーバの整理、必要物品における提言を行った。

6) 年報内容の検討

教員毎の業績が把握できる年報内容となることを検討し、令和4年度年報から順次適用していくこととした。また、年報の項目を2026年に予定されている公立大学評価機構における報告書の記載内容に準拠させることを検討した。

7) 第3期中期計画作成に向けた提言

第3期中期計画作成にむけた自己点検・評価委員会の提言を行った。

<次年度以降に向けた課題・発展>

- 1) 大学基準協会における大学評価で示された改善課題報告書の提出（2023年7月末まで）
- 2) 公立大学評価機構における大学評価（2026年）に向けた本学における取り組みの評価と報告書の作成準備
- 3) 学生委員会、FD委員会、PROG調査の結果評価と学習成果改善に向けた方策を検討
- 4) 教員単年評価の試行と施行後評価
- 5) 本学のIR活動の推進と探究
- 6) 年報における個人業績の明確化と大学自己評価としての活用
- 7) 第3期中期計画における令和5年度計画の実施

4.4.1.8.1 教員評価部会

部会長：濱 耕子 教授

部会員：寺井准教授

活動内容：

<前年度までの課題>

新しい教員評価の導入に伴い、1次評価面接を含めて業務の特性や役割に応じた個々の教員活動の客観視ができるよう、評価スケジュールの案内を継続することで、教員評価への全学的な意識を高めていく。

評価上のペナルティの判断や中途入職者の評価の取り扱いについて、一部の教員から意見聴取ができたが、統一した見解には至っていない。

<今年度の目標・年度計画>

1. 全学的に新単年評価に対して教員活動の改善や見直しができる機会という前向きな意識が高まり、仮試行が進捗できる。
2. 新単年評価体制の構築や評価シートの検討ができ、仮試行による課題や改善点が明らかになる。

<今年度の活動実績・評価>

(1) 学長、自己点検・評価委員長との意見交換による本学教員評価の方向性の確認

5月にこれまでの複数年評価体制の構築について学長、自己点検・評価委員長と意見交換を行った。その結果、教員個々が評価しやすく目標設定を明確にできるシンプルな定量評価であり、今後の大学のあり方としても毎年、教員活動の改善の機会に繋がるような単年評価の形態へ変更することが望ましいとの結論に至った。6月の教育研究審議会において部会長から新単年評価の素案を説明し、今年度に仮試行を進めることが決定した。

(2) 近年の単年評価の動向に関する情報収集と評価体制の構築

先ず、単年評価の体制を構築するにあたり、単年評価の近年の動向を探るため、他大学の評価領域と項目、評価方法（配点や自己アピールを含む）、評価結果の利用（顕彰制度やペナルティ等）を先行研究やホームページ等で確認した。その後、評価方法として評価領域別にエフォート率を設定し目標設定にKGI・KPIを取り入れることや、1次評価者（メンター）や2次評価者（学長）の関わりも含めた個々の教員活動が経年的に把握しやすいシステム化等、本学の方向性を検討した。

具体的には、エフォート率に基づいた教員活動の時間配分については、研究領域は最低30%を目標とすることを提言した。システム化については石川県立大学に尋ねたところ、自己点検・評価委員長が学科長・センター長との面接後の最終評価を電子データで保管し、直近3年の評価領域ごとの集計結果を教育研究審議会や教授会で報告する運びであり、特段のシステム化はしていないということであった。そこで、本学も同様に仮試行としてYドライブでアクセス権限の設定を行い、総務課長と学長が全教員の評価を電子データで把握できる状況にした。

また、自己点検・評価委員長と相談し、単年評価は評価年度を遡り、3年間の振り返りで毎年度評価することを決定した。2024～2026年度から評価実施クール、翌年の2027年度が初めて3年間の評価を表彰やペナルティの選定基準にする、不服申し立てがあった場合の評価者は該当年度で大講座の直属の上司でない教授や学長が再評価を確認した。

(3) 単年評価の体制を全学に浸透させる段階

8月の教員全体会議で自己点検・評価委員長から単年評価で使用するイメージの概説を行った。その後部会長から評価の具体的な理解のために9月の教授会、そして全学への説明会の機会に単年評価シート（素案ver.1）やその運用について提示した。

説明会アンケートの意見や11月の自己点検・評価委員会が出た意見（2次評価は数値化せず確認のみとする）にもとづき評価シート等の修正を行い、年明けからの仮試行に備えた。また、アンケートから聴取できた内容は、後の11月の自己点検・評価委員会を経て12月の教員全体会議にて、Q&A形式でフィードバックを行った。具体的には、入力担当者・入力部分の明示、教育・研究支援の評価内容の説明、社会貢献や管理・運営は1次評価者と相談のうえ5月の面接時に目

標記載してもよいこと、配慮希望欄の記載内容について説明した。

(4) 単年評価の具体的な評価スケジュールの案内と評価方法を紹介する段階

12月の教員全体会議では、自己評価仮試行における入力方法と提出方法、部会からの案内時期を確認した。仮試行の本番に備えて、各教員が評価に取り組み、自身は何をすべきかを見直す機会と理解してもらうための説明とした。若手教員やキャリア支援センターの教員においてエフォートが0%となる評価領域も出てくる可能性があるがそれでもよいこと、中途入職者の仮試行の評価は必須とせず個々の判断に任せることにした。今年度退職する教員には極力退職までに1次評価者と面接し、自己評価を行ってほしいと依頼した。

(5) 単年評価仮試行の実施

既に1月上旬から仮試行の評価プロセスが進行しているなか、全学に対して2月半ばに自己評価仮試行のスケジュール案内を行った。仮試行に関する問い合わせが計13件あり、部会で対応した。3月初旬に数名へ提出の呼びかけを行っているが、評価該当者全56名において単年評価の目標立案と1次評価者からの目標認証が終了した。今後は、5月の1次評価者との評価内容に関して面接、6月初旬には1次評価内容を確認し、7月中旬までに2次評価者を経て自己評価が確定する。

(6) 複数年評価に関して

複数年評価期間であった2020年度、2021年度分の評価は、1次評価者と「教員活動における複数年評価報告資料」（業績一覧）をもとに面接し、大学の評価内容として保管した。

<次年度以降に向けた課題・発展>

1. 単年評価仮試行状況の評価する目的で全学的なアンケートを行う。そこから新たな課題を探りつつ、2024年度の教員評価の改訂に向けて評価のあり方の見直しをする。
2. 教員評価を契機に1次評価者との相談体制をしくことで、講座での関係構築や、業務の円滑な進行等の波及効果が期待される。この点も仮試行後の評価に活かしていく。

4.4.1.8.2 年報編集部会

部会長：金子 紀子 准教授

部会員：中嶋（知）助教、額助教

事務局：外主事

活動内容：

<前年度までの課題>

部会休止中

<今年度の目標・年度計画>

1. 年報第22巻の発刊
2. 年報第23巻に向けた原稿依頼

<今年度の活動実績・評価>

1. 12月に第22巻を発刊した。
2. 第23巻の教員業績の原稿依頼は、教員評価部会作成の新様式と連動させることとし、執筆の負担軽減を図った。また講座単位での構成とすることが自己点検・評価委員会で決まった。これにより講座ごとおよび教員個々の業績が見やすくなる。

<次年度以降に向けた課題・発展>

新様式を活用した講座単位での教員業績となるため、校正依頼等が円滑となるよう進める。

4.4.1.9 FD委員会

委員長：美濃 由紀子 教授

委員：大西講師、田村講師

事務局：砂山専門員

活動内容：

1. 新入職員のオリエンテーション

新入職員に対して、本学の学部・大学院教育および研究、地域ケア総合センター、看護キャリア支援センター、図書館についてのオリエンテーションを行った（4月、10月）。学部・大学院教育のオリエンテーションはオンライン（Zoom）にて実施（録画あり）し、その他のオリエンテーションはオンデマンド型の受講とした。個人のスケジュールに合わせて視聴が可能であった点や再視聴できる点において、受講者からはより理解しやすかったという声が聞かれた。

2. 教員の教育力の改善と向上のためのFD研修

1) 県立大学との合同FD研修会

石川県立大学との合同FD研修会：8月24日にオンライン（Zoom）にて開催した。テーマは、「次世代看護教育・研究へのDXの導入 -VR, AR, アバターロボット等の活用に向けて-」とし、松本勝准教授（成人看護学）に講演いただいた。研修会の参加者数は、県立看護大40名、県立大35名の計75名であった。評価アンケートの回答率は68%であり、約96%が満足と回答していたことから、受講者のDXに関する理解に貢献したものと評価できた。

2) 大学コンソーシアム石川FD・SD研修会

教職員研修専門部会による大学コンソーシアム石川第5回FD・SD研修会：12月22日にオンライン（Zoom）にて開催した。「看護教育・研究へのDXの導入 -石川県立看護大学での取り組み-」というテーマで、松本勝准教授（成人地域看護学）に発表いただいた。

3) 教育力向上のためのFD研修会

FD委員会主催（学長企画）によるFD研修会：12月27日に全教員対象として対面にて開催した。『「教えるを学ぶエッセンス」を学ぶ』というテーマにて、教育開発者の杉森公一先生より、学習者の能動的な学びを促す教え方をどう磨けばよいのかについて講演いただいた。評価アンケートからは、回答者全員が満足したと回答しており、特にハイフレックス型の講義を体験できたことが、今後の自身の講義実践に役立ったという回答が得られた。

4) ハラスメントFD研修会

FD委員会主催（ハラスメント委員会共同企画）によるFD研修会：R4年2月9日にオンライン（Zoom）にて開催した。全教員を対象として、本学のスクールカウンセラーである堂本

彩未先生より、『スクールカウンセラー活動の実際と大学内連携』というテーマで、学生のカウンセリング利用の実態とカウンセリングの活動の実際について報告いただいた。研修会の参加者数は49名であり、評価アンケートの回答率は87.8%であった。98%が満足と回答しており、本研修によって、スクールカウンセラーと教員との効果的な連携について考えるきっかけになったと評価できた。

5) 教職員に向けた研修に関する広報活動

石川県や他県の大学コンソーシアム、他大学等が開催する先進的な教育力向上のFD研修への参加を教員に促し、そこで得られた情報を随時メールにて発信し共有した。

3. 学生による授業評価の実施

1) 授業評価の実施・評価・分析

前期と後期の2期に渡って、Moodle「学習管理システム (Learning Management System; LMS)」を用いて、学生による授業評価を実施した。授業評価の結果は、評価アンケートの回収率、各科目・質問項目ごとの得点を集計し、平均得点を一覧表にまとめた。結果としては、学生の総合的満足の評価は高く、「授業準備」の項目が特に高かった。自由記載については、科目ごとにポジティブな回答とネガティブな回答が混在していた。これらの評価結果を担当教員にフィードバックし、授業改善に活用するように呼びかけた。課題としては、「アンケート回収率の低さ」があげられた。今度、適切な評価を行うためには、回収率の改善は必須課題であり、担当教員へ回収率の増加に向けた工夫を行うこと、教員自身も学生評価に対する意識を高めるよう周知した。

2) 次年度の授業評価項目の検討・修正

学生の授業評価アンケートの回答率の低さが今年度の課題としてあがっており、その背景には学生側の負担も考えられるため、学生委員会と合同で、アンケート項目の見直しとすみわけの作業を行った。次年度の授業評価に向けて、項目の検討・修正を行った。

4. 4. 1. 10 ハラスメント委員

委員長：真田 弘美 教授

委員：小林 (宏) 教授、岩佐教授、米田教授、紺家教授、塚田教授、西田事務局長

ハラスメント相談員：岩佐教授、田村講師、大江講師

活動内容：

<前年度までの課題>

- ①2022年4月からのパワーハラスメント防止措置の義務化についての学内への周知
- ②ハラスメントのないキャンパスの醸成

<今年度の目標・年度計画>

- ①パワーハラスメント防止措置として研修会の開催
- ②ハラスメントのないキャンパスの環境整備
- ③ハラスメント事案が生じた場合の適切な対処

<今年度の活動実績・評価>

- ①新学期のガイダンスで学生と教職員にパワーハラスメント防止措置の義務化と相談体制等

について周知した。

- ②ハラスメントの起こりにくい環境として、個室あるいは3名以上の配置となるよう研究室整備を行った。
- ③FD委員会と合同で2022年11月にハラスメント研修を実施した。
- ④ハラスメントとして委員会に2件申請があり、提訴者から聞きとりを行い、適切に対応した。
- ⑤ハラスメントとしての申告ではないが、学生と教員から5件の相談があった。
- ⑥ハラスメントの適切な対処のために弁護士を入れて対応できる体制を見直した。

<次年度以降に向けた課題・発展>

- ①ハラスメントのないキャンパスの醸成
- ②ハラスメント事案が生じた場合の適切な対処

4.4.1.11 コンプライアンス委員会

委員長：小林 宏光 教授

委員：西田事務局長

事務局：林専門員

活動内容：

<前年度までの課題>

前年度までに本学において研究倫理・コンプライアンスに関する重大な問題は生じていないが、これを継続しコンプライアンス遵守の風土を醸成する。

<今年度の目標・年度計画>

研究会の実施など倫理委員会や総務課など関連部署と連携し、教職員のコンプライアンス意識の向上を図る。

<今年度の活動実績・評価>

令和5年3月3日（金）2限にコンプライアンス委員会・倫理委員会・情報セキュリティ委員会の合同研修会を開催した。内容は以下のとおりである。

1. 研究不正に関する最近の動向と法令順守（コンプライアンス委員会・総務課）
2. 情報セキュリティに関する説明・注意喚起（情報セキュリティ委員会）
3. 来年度からの倫理申請手順について（倫理委員会）

当日参加できなかった方への配慮として、説明会の内容を録画し後日参照できるようにした。本年度の新たな試みとして、説明会内容の理解を確認するためのオンライン小テストを実施し、合格者に受講証を発行した。

<次年度以降に向けた課題・発展>

来年度も引き続き研修会を開催する。今年度実施したオンライン小テストは比較的スムーズに実施できたことから、来年度以降も内容を吟味しつつ継続したい。

4.4.1.12 倫理委員会

委員長：小林 宏光 教授（研究科長）

委員：米澤教授、今井（秀）教授、松本（勝）准教授、木森准教授、大江講師、大西講師

事務局：谷口主任主事

活動内容：

<前年度までの課題>

本学の倫理委員会の厚生労働省の研究倫理審査委員会報告システムへの登録を検討することが前年度からの課題として引き継がれている。

<今年度の目標・年度計画>

①倫理審査を適切かつ迅速に行い、本学の教員・学生の研究推進を図る。

②前年度からの課題である研究倫理審査委員会報告システムへの登録を進めるとともに、これに付随する規定や手順などの整備を進める。

<今年度の活動実績・評価>

①倫理審査の実施

本年度1年間で一般審査53件、迅速審査22件で計75件の審査を行った。R3年度は64件であり20%ほどの増加であった。

②倫理審査手順書の作成および厚生労働省の研究倫理審査委員会報告システムへの登録

これまで整備されていなかった本学の倫理審査手順書を作成し、またこれに伴い倫理関係の規定の変更も行った。また厚生労働省の研究倫理審査委員会報告システムに本学倫理委員会の登録を行った。

③倫理研修の実施

R5年3月3日に学内教職員向けにコンプライアンス合同説明会を行った。この説明会はコンプライアンス委員会、情報セキュリティ委員会と合同開催であったが、倫理委員の米澤教授および木森准教授が「来年度からの倫理申請手順について」と題して40分ほど説明を行った。

<次年度以降に向けた課題・発展>

次年度より新しい手順による倫理審査が始まることから、この新手順の円滑な運用および、必要な見直し等を行うことが来年度の課題である。

4.4.1.13 衛生委員会

委員長：西田 義明 事務局長

委員：岩佐教授、千田助教、河合助教、野川囑託、中川産業医

事務局：外主事

活動内容：

1. 職場巡視

職場巡視前に職員からメールにて情報収集を行ったうえで、3回〔6月、12月、3月〕職場巡視を実施し、学内の施設・設備等の安全衛生管理（新型コロナウイルス感染拡大防止も含む）が適切か確認した。

2. 定期健康診断

受診状況を調査し、「職員保健だより（春号）」やメールにて職員に受診を勧奨した。

3. ストレスチェック、長時間労働

法人の指示に基づき、職員のストレスチェックを7月19日～8月2日に実施した。

職員（転任、新任を含む）にリーフレット「自分の時間外労働について考えよう 働き過ぎて疲れていませんか？」（衛生委員会作成）を配布した。

4. 防災訓練

防火管理者の主導のもと、職員及び学生の防災訓練を7月12日に実施した。コロナ禍のため新しい生活様式を考慮した訓練とした。地震対応訓練の実施と避難経路や消火栓・消火器、AED、車椅子等の設置場所、消火隊の組織や役割等の説明を行うとともに、動画視聴により消火・避難訓練の方法を確認した。

5. 「職員保健だより（春号）（冬号）」の発行

春号では、定期健康診断の受診勧奨について掲載した。冬号では、コラム「口と健康」、ストレスのセルフケアについて掲載した。

4.4.2 特設委員会

4.4.2.1 基礎科学教育拡充ワーキング

委員長：市丸 徹 准教授

副委員長：真田教授（学長）

委員：小林教授、垣花教授、松田准教授、工藤講師、今井（美）教授、岩佐教授、
今井（秀）教授、平居教授、木森准教授、紺家教授、峰松教授

事務局：南主事

活動内容：

<前年度までの課題>

1. 基礎科学教育等の拡充のため必要な施設整備や備品等を検討
2. 大型機器・設備の導入と維持を支える恒常的な支援体制の提案

<今年度の目標・年度計画>

基礎科学教育等の拡充のため必要な施設整備や備品等を検討する。

<今年度の活動実績・評価>

備品購入予算の根拠資料が残っておらず、活動を中止した。

<次年度以降に向けた課題・発展>

なし。

4.5 令和4年度 卒業研究論文題目一覧

領域または科目群	氏名	論文題目
人間科学領域 (8人)	荒川 星来	ベビーカー走行時の振動計測 －人形に伝わる振動の大きさと周波数の分析－
	田本怜和那	ナイチンゲールがLieutenant-Colonel Bairdに宛てた書簡の解題
	平塚 芽衣	ベビーカー走行時の振動計測－歩行速度による振動の特性の変化－
	古市 希亜	スモールチェンジ活動が労働者の身体活動や健康状態に及ぼす影響
	松田 遥奈	ベビーカー走行時の振動計測 －3輪と4輪のベビーカーの違いによる振動特性の変化－
	宮西 希実	イリノイ大学フローレンス・ナイチンゲール自筆書簡コレクション Queen Victoria宛の手紙の転写・解題・考察
	山岸 未侑	緩やかな起伏のある地形を利用したウォーキングの運動効果
	横山 希帆	「スモールチェンジ」方略による地域在住高齢者の健康づくり －運動習慣のある高齢者を対象に－
健康科学領域 (13人)	石山 桃佳	HPVワクチンキャッチアップ接種世代の子宮頸がん予防に関する知識 と態度の状況について－接種経験者の接種回数別の検討－
	奥野 日菜	食道がん、胃がん、肝及び肝内胆管がんの年齢調整死亡率と栄養素 摂取量との関連について－都道府県別データを用いた検討－
	氣谷 理帆	認知症とオーラルフレイルに関する研究 －栄養指標と食事内容の視点から－
	北橋 英幸	ハマボウフウの新規生物作用に関する基盤的研究
	北村 晴香	月経周辺期の女性がパートナーに求める関わり方
	久保 優花	HPVワクチンキャッチアップ接種世代の子宮頸がん予防に関する知識 と態度の状況について－接種経験別の検討－
	染谷 佳那	リモートワークによる労働者のメンタルヘルスに関する研究
	谷元 美紗	タッチングにおける触れられる部位と性別による感じ方の違い
	直江 桃菜	ALS患者における症状の進行に応じた意思伝達装置の使用に関する問題 についての文献検討
	永田 夏美	ALS患者の長期療養生活に楽しみがもたらす生きがいについての文献 検討
	浜本花奈美	乳がん、子宮がんおよび卵巣がんの年齢調整死亡率と食品群の摂取量 との関連について－都道府県別データを用いた検討－

領域または科目群	氏 名	論 文 題 目
健康科学領域 (13人)	山岡 由芽	日本人男性の下部消化器系がんの年齢調整死亡率と食品群の摂取量との関連について－都道府県別データを用いた検討－
	吉田 里菜	石川県下の病院における看護師の生理休暇の実態
基礎看護学 (11人)	浅谷 純菜	SDGs研修会に参加した看護学生の社会人基礎力の特徴
	泉 陽菜	地域の特性から見たSDGs未来都市計画に関する比較研究
	小田原羽海	地域高齢者によるとろみ溶性水性食品の味覚強度とおいしさの評価
	角田 真優	大学生のSNS利用と対人関係能力の関連 －2021年から2022年の文献検討－
	神本 彩耶	高等学校におけるESDを基盤としたSDGs教育に関する文献検討
	佐藤 彩菜	ポケットサイズ型超音波診断装置で測定した下大静脈径に座位時間が及ぼす影響
	高橋 真美	看護学生における手荒れ予防の知識と教育へのニーズに関する実態調査
	瀧澤 梨乃	妊婦や育児中の母親の防災への意識と備えに関する文献検討
	丹羽 若菜	壮年期の慢性心不全患者が働きながら自己管理をする中で体験した困難とその対処
	塗師和佳奈	看護学生の手指衛生と手荒れ予防行動の実施状況と手荒れとの関連性
	松本 華奈	地域高齢者によるとろみ溶性水性食品のとろみ強度と飲み込みにくさの評価
母性看護学 (8人)	石垣 結	低出生体重児の発達に影響を及ぼす要因についての文献検討
	上田 芽依	HPVワクチンの男性接種の認識に関する文献検討 －国外の文献から日本での接種率向上を目指す支援を考える－
	北村 悠帆	妊婦や家族の出生前検査受検にまつわる思いについての文献研究
	小浦 紗耶	病院受診時におけるLGBT当事者と看護師の困惑に関する文献検討
	酒井菜々子	思春期男子に向けた親から受けた性教育の実際と家庭内性教育への支援に関する文献検討
	谷田きなり	不妊治療中の女性の体験と思いに関する文献検討
	中村 玲菜	帝王切開術を受けた女性の心理的变化と看護援助の在り方
	林 雪乃	不妊治療中の男性の体験・思いに関する文献検討

領域または科目群	氏名	論文題目
小児看護学 (3人)	池島 梨紗	看護学生の防災意識と関連する要因の検討 －防災意識と災害への備えの関連から－
	中嶋 夏海	看護学生の防災意識と関連する要因の検討 －これまでの経験に焦点をあてて－
	西渡 千恵	看護学生の防災意識と関連する要因の検討 －防災教育との関連から－
成人看護学 (16人)	内潟 瑠菜	皮膚・排泄ケア認定看護師によるオンライン褥瘡回診によりケア支援を受けた療養病棟の看護師の思い
	岡村 涼花	認知症高齢者の行動心理症状（BPSD）を緩和する具体的な看護援助に関する文献検討－転倒予防ケアに焦点を当てて－
	飼沼菜々子	終末期がん患者の食事に対する思い
	角田あすか	看護師を対象としたグリーフワークで語りの内容
	河村 唯	急性期看護学実習における看護学生の困難感と学びのプロセス －術後観察場面に焦点を当てて－
	下橋 和也	初学者を対象とした非対面での膀胱エコー教育による技術習得度に対する効果検証：対面教育と遠隔ライブ教育の比較
	杉浦 裕愛	初学者を対象とした非対面での膀胱エコー教育による技術習得度に対する効果検証：対面教育とVRオンデマンド教育の比較
	染谷 実那	ポータブル測定器を用いたスキンプロットティングによるアデノシン三リン酸（ATP）測定法と前処理法の研究－褥瘡発生を予測するATPポイントオブケア検査の開発－
	田中 愛莉	セルフモニタリング心エコーによる心不全療養者の再入院予防 －高齢者による下大静脈の描出に向けた実現可能性の検討－
	田中 亜美	アデノシン三リン酸のポータブル測定装置を用いたスキンプロットティングによるマウス皮膚の圧迫による組織損傷の評価：褥瘡予測ポイントオブケア検査の開発
	田之尻らら	ポータブル検査装置を用いたアデノシン三リン酸（ATP）スキンプロットティング検査の信頼性の検証：褥瘡発生を予測するポイントオブケア検査の開発
	寺井 萌	急性期看護学実習における看護学生の困難感と学びのプロセス －清潔ケア・コミュニケーション場面に焦点を当てて－
	藤尾 大夢	セルフモニタリング心エコーによる心不全療養者の再入院予防 －遠隔指導にAR技術を援用した健常成人による下大静脈の描出に向けた実現可能性の検討－
	本田 暖人	緊急入院かつ緊急手術をすることになった患者の家族の思い
山崎 菜月	終末期がん患者に関わった看護師がデスカンファレンスを通して得られた心情に関する文献研究	
山本 翔子	膀胱エコー教育に対する初学者の主観的評価：対面教育と非対面教育の比較	
老年看護学 (5人)	荒井 愛実	認知症高齢者の家族介護者の日常生活におけるふれあいの実態
	沖田 真依	高齢患者の術後せん妄予防のための看護介入に関する文献検討

領域または科目群	氏 名	論 文 題 目
老年看護学 (5人)	津田 珠海	就寝前の温浴による認知症高齢者の夜間睡眠への影響(予備的調査)
	松村 愛	認知症の診断告知が家族に与える影響と家族が必要とする支援
	山下 茉鈴	療養病床等に入院中の高齢者の拘縮予防・改善のために看護師が行うケアに関する研究
地域看護学 (5人)	源 千尋	都市部と過疎地域における孤立の要因についての文献検討
	越山 遥香	日韓両国の女子大学生の瘦身願望と健康に影響を及ぼす要因についての文献検討
	田中 佑佳	ICTを活用した保健活動の実態に関する文献検討
	西村 悠菜	高齢者の水平組織への社会参加で得られる精神的効果に関する文献検討
	前濱明日香	低出生体重児とその母親の在宅移行支援において保健師に求められる役割に関する文献検討
在宅看護学 (5人)	川畑 佐奈	地域連携の状況がコロナ禍の訪問看護に与えた影響についての文献検討
	北川 るな	セルフ・ネグレクト高齢者の支援に関する文献検討
	嶋田さくら	石川県における新型コロナウイルス感染症流行以降の特別養護老人ホームでの面会制限の状況と看護師の看取りに対する認識
	高畠 唯	在宅での看取りに関連する住民の認識 ー石川県内灘町を対象としてー
	町田 瑞季	精神疾患を抱える療養者の在宅移行期における家族支援に関する文献検討
精神看護学 (5人)	加藤今日子	生理学的指標からみたタクティールケアの効果についての文献検討
	岩田 一花	通常学級に通う発達障害児や発達障害が疑われる児童生徒およびその保護者を対象とした養護教諭の実践する支援の現状
	木谷 朱里	怒りを表出した患者との関わりの再検討 ープロセスレコードを用いてー
	竹内 雅結	医療観察法に基づく通院処遇対象者への訪問看護に関する文献検討
	平塚 唯衣	精神科病棟において身体疾患を併発した終末期患者の看護の方向性 ー文献検討を通じてー